

学生の情報技術を活用した地域教育力向上

～ PC サポートチーム「CAST」による地域子ども教室推進事業の実施～

Progress in the Regional Education Ability

Assisted by the Students of TUINS with Their Computer Literacy

上坂 博亨

UESAKA Hiroyuki

要約

文部科学省が推進する「地域子ども教室推進事業」の一環として、富山県では平成 16 年度から「子どもかがやき教室」を実施してきた。大山地区では平成 16 年度は大山町かがやき教室として、平成 17 年度からは富山市かがやき教室として活動を推進している。本学学生によるパソコンサポートチーム「CAST」は、当初から大山教育行政センターからの依頼を受けて指導員として活動してきた。その結果、学生自身の技術力やコミュニケーション力が向上したばかりではなく、責任感や本人の自信に関しても良好な変化が見られた。また地域の学術的拠点としての大学が、地域教育力向上に貢献することができた。これらをとおして学生による地域貢献と実践的学生の教育の意義について考察した。

はじめに

最近になっていじめ問題や子どもたちが関わる重大事件が増加しており、この背景には子どもたちを取り巻く地域の教育力低下が指摘されている¹⁾。この状況に緊急に対応し地域の力で子どもたちを育むことを狙って文部科学省では「地域教育力再生プラン」を平成 16 年度から実行している²⁾。

大山地区(旧大山町)に立地する富山国際大学は地域の学術的拠点としての存在意義があり、さまざまな観点からの地域貢献が求められている。取り分け地域学部情報コースにおける情報技術教育は地域における問題解決に主眼をおく応用技術教育である。すなわち大学で学んだ情報技術を活用して地域からの要請に応え、あるいは地域の子どもの健全な育成に資することは、地域学教育の目指すところでもあり、また地域に根ざす大学の存在意義を示す機会でもあると考えられる。

本稿では本学学生の自主性によって設立された PC サポートチーム CAST が、大山教育行政センター(旧・大山町教育委員会)の要請に応じて実践してきた文部科学省主導の地域教育力再生プラン「富山市かがやき教室」について、平成 16 年度から 18 年度までの活動を総括し、その効果を検証する。さらに大学生が地域で活動することによる「地域教育力再生」への貢献と、地域活動を通して得られる実践的教育効果について考察する。

CAST 設立の趣旨と経過

大学生が身につけた情報技術を使って、地域住民からの技術的要請に応ずる事は、地域住民の利便性を向上するばかりでなく、実践的教育の観点からも効果的な手法と考えることができる。

富山国際大学 PC サポートチーム CAST は、本学地域学部の学生が中心となって、平成 15 年 11 月に学生主体で設立した学生組織である。CAST 設立の趣旨は以下の 3 つの要点からなっている。一つ目は大学生が地域住民や学校への情報通信技術サポートを行う事で、大学生と地域住民との対話を促進し、富山国際大学と地域との知的交流をすすめる事である。大学が地域における知の中核となり、地域の発展に寄与することが大学の存在意義でもあると考えている。二つ目は大学生自身が教室で学ぶば

かりでなく、地域の情報通信技術サポートを通して実際の問題に触れて自らの技術を実践的に鍛え上げる鍛錬の場とする事である。同時に、社会的経験を積むことで豊かな人間性を養うことも合わせて狙っている。三つ目は来るべき電子行政社会に備えて、地域の情報インフラの整備、地域住民の情報活用能力向上に微力ながら貢献する事である。

CASTの活動はその設立趣旨から、基本的にはボランティアであり活動の対価は求めないことが理想である。しかし現実的に活動を推進するためには、移動のための交通費、修理のための道具や材料費、サービス実施や自らの技術向上のための機材費など、若干の運営経費が必要となる。そこでCASTのサービスは完全な無料ではなく若干の対価を要求する「有償ボランティア」とした。これによって部員の奉仕意欲と責任感が高まり、活動に緊張感が得られた。

活動の内容としては、当初は一般家庭向けの地域サービスを主目的としてスタートした。しかし、一般家庭からの要請よりもむしろ教育委員会や商工会などの地域組織からの要請が多数を占め、徐々に地域組織と密に連携した活動を主体とするように変化してきた。本稿で報告する地域子ども教室推進事業「富山市かがやき教室」も、大山教育行政センターと連携した活動である。

地域子ども教室推進事業の概要

文部科学省による地域教育力再生プランの実施

本プランは文部科学省から発案され、地域教育力の再生を総合的に進める観点から地域に根ざした多様な活動の機会を提供することを目的としている。「地域子ども教室推進事業」はこのプランの持つ5つの事業の一つで、子どもたちが放課後安心して、遊びをはじめとする様々な活動が行えるよう、地域にふさわしい活動拠点を地域に確保することに主眼をおいている。具体的には、学校等の施設を利用して計画的に子どもたちの居場所を整備し、地域の大人の教育力を結集して、子どもたちの放課後や週末のスポーツ活動や文化活動を推進する。この事業は都道府県における行政・学校教育・PTA 関係者・各種スポーツ団体・ボランティア団体などで構成される運営協議会として組織化されることが平成16年度施策に述べられており、同年度より各県、各市町村において具体的に推進されてきた。

富山県においては「子どもかがやき教室推進事業」として平成16年度から3年計画で推進されてきており、具体的には県からの委託として各市町村が事業を実施する形態となっているⁱⁱⁱ。大山町では平成16年度に、大山町教育委員会が主催して場所の確保、居場所作りコーディネータの配置を行ってきた。また平成17年度からは大山町は富山市に合併となったことから、富山市教育委員会が主催する富山市子どもかがやき教室の大山地区拠点として事業を実施してきた。

大山地区における子供かがやき教室推進内容

平成16年度から18年度にかけて大山地区で実施された具体的活動内容を表1に示す。平成16年度は初年度であることから対象校区を大庄小学校地区に限定して、大庄小学校を活動場所として実施した。続く17年度・18年度では対象校区として上滝小学校校区を追加し、2校区にて実施した。各年度とも実施場所としては小学校校舎の適切な場所を選択し、例えばおやつ作り教室では家庭科室を、また自然教室では体育館やグラウンド、図工室などの施設を利用した。それぞれの活動においては、大山地区で募集された地域の大人が指導員を担当し、教室だけでは学ぶことのできない貴重な知識や技術を児童

たちに指導した。CAST はこれらの活動のうちの「デジタル教室」を主に担当し、情報機器を用いた子どもたちのためのカリキュラムを考案して実践した。

表1 . 大山地区における子どもかがやき教室の実施内容 . CAST はこれらの中でデジタル教室を担当してカリキュラムを実践した .

実施年度	活動内容	対象校区ごとの実施回数	
		大庄小学校	上滝小学校
16年度	デジタル教室	8回	-
	おやつ作り教室	4回	-
	将棋教室	3回	-
17年度	将棋教室	6回	6回
	デジタル教室	8回	8回
	自然教室	4回	4回
	ネイチャーツアー	1回	1回
	おやつ作り教室	4回	4回
18年度	囲碁教室	4回	4回
	デジタル教室	4回	4回
	自然教室	4回	4回
	ネイチャーツアー	1回	1回
	おやつ作り教室	4回	4回

デジタル教室の実践

全てのデジタル教室は、対象校所有のコンピュータ室を借用して実施した。大庄小学校、上滝小学校の両校ともにパソコン約40台を擁するコンピュータ室を設備しており、パソコンはインターネットに高速接続可能な状態であった。またLANを介してネットワークプリンタが接続されており、全てのパソコンから白黒印刷が可能な状態であった。カラー印刷に関してはインクジェットプリンタをローカル接続することで可能であり、必要に応じてCAST所有のインクジェットプリンタを持ち込んで使用した。コンピュータ室の機器使用に関しては各校独特の事情があり、学校側のコンピュータ管理者と常に連絡が取れる体制を作っておき、問題発生時には迅速に支援が受けられるように準備した。

ソフトウェアに関しては、両校とも教育用ソフトウェアとして一太郎スマイルシリーズがインストールされており使用可能な状態であった。またそれ以外のソフトウェアに関しても、各々のパソコンのソフトウェア構成は管理サーバによってライセンスとともに管理されており、生徒や外部の利用者が自由にインストールすることは制限されていた。このことからCASTメンバーが使用するソフトウェアに関してはあらかじめ管理者の許可を得て事前インストールしておくか、特別なインストール操作を必要としないソフトウェアを利用する必要があった。児童たちへのプレゼンテーションは、プロジェクターを用いて教卓あるいはCAST所有のノートPCの画面をスクリーンに投影して行った。具体的には1人がスクリーン前に立って専門に説明する発表者(Presenter)となり、残りのメンバーはTA(Teaching Assistant)として児童の間を机間巡回し、必要に応じて個人指導した。人前でプレゼンテーションに不慣れな大学生が児童相手に説明することの難しさを考慮して、TAと生徒の人数比は経験的に1:4ないしは1:5とした。1クラスあたりの児童数は30名前後の予定であったことから、CASTメンバーの人数は1クラスあたり5~6人としてメンバーローテーションを作成した。

平成 16 年度の活動

初年度のトライアルとして大庄小学校をモデル校として選定し、デジタル教室を実施した。児童の募集は大山町教育委員会から学校を通じて呼びかけたが、30 名程度を募集したところその 2 倍を超える 63 名の応募があり、急遽 A 班、B 班の 2 グループに分割して第 1 回と第 2 回に時期を分けて実習を実施した。実習は対象校である大庄小学校のコンピュータ室を利用して恐竜撮影会、カレンダー作り、ブーメラン作りの 3 つの企画を実施した。

恐竜撮影会とは、デジタルカメラを用いて恐竜のミニチュアをあたかも本物のように迫力ある写真として撮影する企画である。日頃持ちなれないデジタルカメラを持って、児童たちは興味津々で取り組んでいた。撮影した結果はパソコンに取り込み、インクジェットプリンタを用いてカラー印刷し、児童が持ち帰った。

カレンダー作りの企画では、前日に撮影した恐竜写真を Ms-Paint を利用して加工を施し、Just Smile のカレンダー機能にとりこんでオリジナルのカレンダーを印刷した。Just Smile は日頃から児童が慣れているソフトウェアではあるが、カレンダー作りの機能については経験がなかったため、あらかじめ学生によって操作手順書を作成して説明に取り組んだ。Just Smile そのものには児童は近親感もあったため大きな混乱なく円滑に実習ができた。作成したカレンダーは教室に設備されているカラープリンタで出力してそれぞれ児童が持ち帰った。

ブーメラン作成においては、ブーメランの型紙(図 3-1)を写し取ったファイルを作成して、あらかじめ児童のパソコンにネットワーク経由で配布しておき、これを持ちいて実習をおこなった。児童は配布されたファイルを Ms-Paint を用いて開き、これに思い思いの絵を描いた。描き終わった型紙ファイルはカラープリンタを用いて少し厚みのある用紙に印刷した。これでオリジナリティー溢れるブーメランが出来あがる。ほとんどの児童がブーメランを作成し終わった頃に、出来上がったブーメランを持って体育館に移動し、みんなでそれを飛ばして楽しんだ。

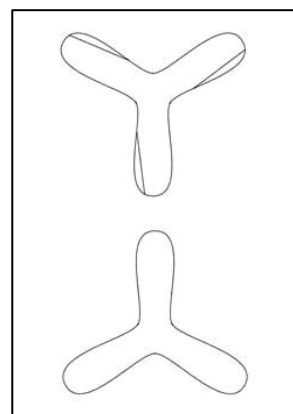


図 3-1 ブーメランの型紙

平成 17 年度の活動

2 年目にあたる平成 17 年度には、対象校を大庄小学校と上滝小学校の二校に増やして実施した。児童の募集は 16 年と同様に大山教育行政センター(旧大山町教育委員会)から学校を通じて児童に呼びかけた。各校 30 名の募集を行ったところ、大庄小学校では定員を超える 39 名が、上滝小学校では 23 名が集まった。また 17 年度は開催回数を昨年の 2 倍にすることとなり、各校 8 回ずつ、2 校合わせて合計 16 回の教室を開催した。実習は 16 年度と同様に対象校である大庄小学校および上滝小学校のコンピュータ室を利用して、うちわ作り・ペーパープレーン¹作り、缶バッジ作り、紙ずもう作りの 4 つを実施した。うちわ作りにおいては、あらかじめプラスチック製の「うちわの骨」を人数分準備し、そのうちわに合った大きさの型紙を作成して、スキャナーを使ってイメージファイルに保存しておく。実習ではファイルを児童に

¹ 型紙を切り抜いてセメダイン等で貼り合わせるなどして、精密に作成する競技用の紙飛行機。滞空時間は 1 分以上に及ぶものがある。

配布して MS- Paint を使って型紙のファイルに自由に絵を描き、それをラベル用紙にプリントしてはさみで切り抜き、うちわの骨に貼り付けることで作成した。ペーパープレーン作りでは、まず市販のペーパープレーンから型紙を作成して A4 判の紙に描き、これをスキャナーで取り込んでイメージ化したものをファイルに保存しておく。実習ではファイルを児童に配布して Just Smile を使って型紙のファイルに自由に絵を描き、これを切り抜いてペーパープレーンを作成した。紙のパーツは 10 点以上にも及ぶため、低学年には難しい内容の工作となったが、高学年の児童がよく手助けをしてくれて CAST メンバーを補助してくれた。出来上がったペーパープレーンは、次の日の実習の時間に体育館で飛ばして楽しんだ。

缶バッジ作りは株式会社バンダイ製の缶バッジ作成キット『Can バッジ good! Super』を用いて実施した。作成キットには作成機とバッジパーツが含まれるので、実習ではバッジに封入するデザインを作成した。

表 2 . 平成 16 年度の活動概要：初年度でもあるので大庄小学校をモデル校として選定し、実習（デジタル教室）を実施した。

グループ	16年度実施時期	対象校	参加児童数	CASTメンバー数	内容
第1回	11月1日～11月29日	大庄小学校	34名	6名	恐竜撮影会 カレンダー作り ブーメラン作り
第2回	12月6日～1月17日	大庄小学校	29名	6名	恐竜撮影会 カレンダー作り ブーメラン作り

表 3 . 平成 17 年度の活動概要：2 年目は上滝小学校を対象校に追加して、各々 4 日間ずつ実習を実施した。1・2・4 回目では、受講生が多くまた低学年の応募が多いことから同じ題材の実習を 2 日間ずつ実施した。

グループ	17年度実施時期	対象校	参加児童数	CASTメンバー数	内容
第1回	8月24日～8月30日	上滝小学校	21名	5～6名	うちわ作り ペーパープレーン作り
第2回	9月26日～10月24日	大庄小学校	39名	4～6名	うちわ作り ペーパープレーン作り
第3回	11月28日～12月19日	上滝小学校	23名	5～6名	クリスマスカード作り カレンダー作り 缶バッジ作り 紙ずもう作り
第4回	1月23日～2月13日	大庄小学校	38名	5～6名	缶バッジ作り 紙ずもう作り

表 4 . 平成 18 年度の活動概要：3 年目は上滝小学校と大庄小学校にて実施した。いずれも昨年度より参加希望者数が多数に上ったため（印）、全体を 2 つのグループに分割して、それぞれの題材を 2 回ずつ実施した。

グループ	18年度実施時期	対象校	参加児童数	CASTメンバー数	内容
第1回	8月1日～8月4日	大庄小学校	47名	4名	下じき作り かざぐるま作り
第2回	11月27日～11月30日	上滝小学校	46名	4名	下じき作り 絵てがみ作り

デザインは、あらかじめ決められた直径の円を描いた型紙のイメージファイルを児童に配布し、MS-Paintを使用して作成した。作成したデザインは、引き続きカラープリンタで印刷し、ハサミで切り抜いて缶バッジに封入した。本実習では缶バッジ作成機が2台しかなかったため、缶バッジへの封入の工程が律速段階となり時間がかかることがわかった。

紙ずもう作りはペーパーブレン等と同様に型紙を使用して実施した。型紙はA4判の紙に描き、これをスキャナーで取り込んでイメージ化したものをファイルに保存しておく。実習ではファイルを児童に配布してJust Smileを使って型紙のファイルに自由に絵を描き、これを切り抜いて力士を作成した。すでに児童たちはJust Smileの使い方にもなれ、技術的に習熟してきたため作成はスムーズに行われた。力士が出来たあとで、あらかじめ紙で作成しておいた土俵に置いて紙ずもうをして楽しんだ。

表3の第3回目に示すように、上滝小学校で実施したデジタル教室の2回目では、クリスマスカードとカレンダー作りも合わせて行った。これは上滝小学校での希望者数が大庄小学校に比べて少なかったこともあり実習が比較的スムーズに進んだことから、実施内容を追加したものである。またクリスマスカードとカレンダー作りは時期的にも相応しいことから実施に及んだ。どちらもJust Smileの機能を利用して実施した。

平成18年度の活動

最終年度にあたる平成18年度は、17年度に引き続き対象校を大庄小学校と上滝小学校の二校として実施した。児童の募集についても16年度、17年度と同様である。募集の結果、30名の定員を大きく上回り、大庄小学校では47名、上滝小学校で46名の応募があった。過去2年間の経験によりTAと児童の比が1:5を越えると指導が難しくなり教室に私語が目立つようになる。そこで18年度は各小学校区ともに応募児童を2つのグループに分割してAグループおよびBグループとし、同様の内容を2回にわたって行った(表4:参加児童数に印が付けてあるが、これは2回分の合計児童数を表す)。

下じき作りの実習においては、A4判の用紙に自由に絵を描いたものを、ラミネーターをもちいてプラスチックフィルムで封入することで「下じき」を作成した。絵を描くにあたっては児童が取り扱いに慣れているソフトウェアとしてJust Smileを使用した。当ソフトには絵を描くための素材が多数準備されており、比較的短時間に見栄えのよい絵を描くことができる。児童たちは2枚のA4用紙に絵を描き、これを下じきの表・裏それぞれの図案としてラミネーターで封入した。ラミネートは下じきとして十分な固さがあり実用に耐える下じきが作成できた。

かざぐるま作りの実習では、あらかじめかざぐるまの下絵を書いたデータファイルを準備してこれにPaintを利用して児童たちに絵を描かせ、これを画用紙に印刷して製作をおこなった。かざぐるまの羽になる部分は、ゼムクリップとストローをつかって割り箸に固定し上手く回るように調整した。本来は待ち針を使って回転中心を止める方法がオーソドックスであるが、子どもたちの怪我を考慮してゼムクリップを使用した。多少のひっかかりはあるものの、上手く曲げれば十分に回転するものが作成できる。

絵手紙作りの実習は、フリーウェアである絵手紙ペイントTMを使用して実施した。本ソフトウェアはペイ



図3-2 絵手紙作画の例。石黒奈緒美氏作

ント系のグラフィックソフトであるが、毛筆や絵筆を使ったような描画が可能で、個性的な絵や文字が描けるところが特徴である(図3-2)。児童たちは絵手紙ソフトには馴染みがないため、最初の30分ほどはソフトの説明をおこない、続けて自由製作を行った。

考察

実践的教育としての大学生への効果

パソコン操作能力の実践的習熟

CAST 設立の趣旨でも述べたとおり、パソコン操作能力の向上は CAST の活動の重要な目的の一つである。今回のかがやき教室「デジタル教室」の実践を通して学生たちは表5のような情報技術を学んだ。これらの情報技術の中で、Windows の操作、デジタル画像の取り扱い、ペイント系ソフトの操作、フリーウェアの導入などは通常のパソコン使用でもしばしば必要な技術である。しかし LAN の構築と運用や、ドライバソフトの導入などは学生が触れる機会が少ない技術の一つである。小学生に実習を行わせるに当たっては、事前に大学内で実習環境と同様の LAN 環境を作成してあらかじめ十分な練習をした。その際には LAN 設置の技術が必須となり、学生たちのネットワーク技術力向上に大きく貢献した。また実習全体を通してカラープリンタを用いた印刷の機会が多く、LAN に接続したインクジェットプリンタ環境の構築が必要な場合もあった。このような時はネットワークプリンタの設定や、それに必要なドライバ群のインストールなど、通常のパソコン使用では触れることの少ない技術も修得せざるを得なかった。このようにして、様々な技術を実践で活用できたことは本デジタル教室の大きな教育効果と考えられた。

CAST には大学2年生から4年生までの学生が混在して所属しており、その情報技術力も個人によって多様である。一般に学年が進むにともなって情報技術力も向上するが、より技術力のある学生が未熟な学生に実践をとおして指導することは、教室などでの座学に比較して教育効果が高い。さらに指導している学生にとっても記憶の定着や細部の理解に役立つ。このような学生同士の自己研鑽は技術力向上に多大な効果が見られる。今後は効果についての客観的な測定が望まれる。

表5 . 学生たちが学んだ代表的な情報技術

技術の種類	関連する作業
Windows(OS)の操作	児童への説明、ファイル作成と保存など
LANの構築と運用	実習環境の整備、ネットワークプリンタの設定など
ドライバソフトの導入	プリンタインストールなど
デジタル画像の取り扱い	デジカメ写真ファイル操作、イメージ加工
ペイント系ソフトの操作	Ms-Paint, Just Smile などのソフトウェア操作
フリーウェア導入	絵手紙などの検索とダウンロード、導入

コミュニケーションおよびプレゼンテーション能力の習熟

本デジタル教室の活動を実施するにあたっては大山教育行政センター(旧:大山町教育委員会)との継続的で詳細な打ち合わせが必須であった。大学生と地域住民との密接な意思疎通の機会は普段から多くはないので、デジタル教室に関する打ち合わせは貴重なコミュニケーションの機会であったと言える。学生同志の会話は、地域の大人との会話とは様式(使用する単語・敬語・表現方法)が異なるため、初期の打ち合わせは緊張した状況で進められ会話もたどたどしいが、慣れることでスムーズな会話が可能となったようである。

児童に説明する局面では、MS-PowerPoint を使用したプレゼンテーションが不可欠である。ここではPowerPoint の操作もさることながら、児童に理解させるためのプレゼンテーション技術が要求される。特に大きな声で明瞭に発音すること、聞き手の反応を確かめながら速度を調節すること、児童が飽きないように工夫すること、などが重要なポイントである。ここで難しいことは「および」であるが、取り分け難しいのは「」である。いつもは「教えてもらう」側の学生にとって児童相手に説明することは普段と逆の立場から話しをすることになり、始めはなかなかスムーズにすすまない。しかしやがて、個人差はあるが、練習によってほとんどの学生は児童の前でスムーズに話しが出来るようになった。これは、教室で指名された時にすら満足に発表ができない近年の大学生も、トレーニングによって急速にプレゼンテーション能力が改善できる可能性があることを示唆している。

統率力・責任感・自信などへの影響

今回のデジタル教室運営の1つの特徴は、企画内容ごとにリーダーを設定し、企画の遂行に「責任と権限」を持たせた事である。リーダーは担当する企画内容に関して詳細に理解して準備をしなければならず、また必要に応じてメンバーに仕事をさせる必要もある。これらをとおして組織的な統率力が育成される。現実的にはそれほどの威圧感はなく、むしろ「責任と権限」は積極的に準備作業や実践に取り組む原動力となるケースが多かった。この点では営利追求を目的とする現実の会社組織とは異なり、人間関係を複雑にするほどの影響力がなかったことが幸いしたと考えている。また任された実習に関してリーダーとして実践した学生にとっては、それをやり終えたときの充実感は満足するに充分であり、これが自信につながっていることが態度に表れていた。その点でも、模擬的に構成した組織ではあるが、十分な社会体験ができていると評価できる。

受講児童および保護者に与える効果

平成16年度のかがやき教室を実施した際に、参加した児童と保護者にアンケートを実施した結果によると、『かがやき教室が無かった1年前はどこにいたか』という問いに対して「自分の家」と答えた児童が、回答児童18人の内8名と最も多く、以下友達の家(4名)、学習塾(2名)、学童クラブ(2名)と続いた。これは「地域の教育力の充実に向けた実態・意識調査(速報)」(参考文献4)において、放課後から夕食までの過ごし方としてテレビゲームやコンピュータゲームをあげた児童が約半数を占めた結果と関連があると見ることができる。また『なぜかがやき教室に参加したか』という問いに対しては、回答児童14人の内7人が「楽しいから」と回答しており、以下、保護者が行けと言った(4名)、家にいても暇(2名)、友達がいる(1名)と続いた。これらの結果からも児童に場所を提供することで、児童は自ら遊び場所を求めてゲームから離れてくる可能性が示唆される。さらに保護者がこれを推進することで効果が更に高まると可能性が

示されている。また保護者に対するアンケートでは、『子どもが地域の子ども教室に参加することをどのよう感じているか』という問いに対して、回答保護者 20 人のうち 9 人が『いろいろな体験ができて楽しい』と回答、また 7 人が『普段できないようなことができる』と回答しており、子どもたちがゲームを離れて楽しんでいることを示唆する結果が得られている。以上の結果からも、地域の大人が子どもたちのために場所と知恵を提供することで、子どもたちは家庭に閉じこもることなく外に出てくるのが期待できると示唆された。また、これを推進するためには地域の大人が教育的見地から組織的に子どもたちに働きかけることが必要であり、これが『地域教育力』として求められているものであると解釈できる。

地域教育力再生と実践的學生教育

地域の教育力が低下することは、その地域がもつ『子どもを育む力』が低下することを意味するが、全国的にみても地域の教育力低下が問題となっている。地域社会に関わる子どもの学年をみると小学校高学年がピークとなり、中・高校生では低下する傾向があると報告されており^v、地域の大人が子どもたちと関わる時間を必要としていることを示唆している。しかしながら諸事情により地域の大人が子どものために時間を割くことが困難な場合は、地域の大人に代る『地域教育力』が求められることになる。大学は高等教育機関として県あるいは全国の高等教育を担当する役割を担うが、言うまでもなく地域の学術拠点として、近隣地域に対する学術的貢献(地域貢献)の役割も併せ持っている。大学が行う地域貢献としては講演会や授業開放などが一般的であり、多くの大学で同様の活動が行われている。しかしこれらは必ずしも近隣地域の要求に合致しているとは限らず、公開講座などへの参加者集めに奔走するケースも多々見られる。大学による地域貢献が形骸化しないためにも、地域からの求めに応じた地域貢献が望まれる。

ところで大学には教員ばかりではなく、高等教育を受けた学生が多数在籍しており、様々な知的資源が地域で活用可能な状態にあると考えられる。言うまでもなく学生数は教員数に比べて圧倒的に多く、知的資源の提供体制も常に充分であると言える。この点で CAST の活動は大学に存在する活用可能な知的資源を地域に開放するための方策の一つであるとも考えられる。今回のデジタル教室での活動は、地域からの要請と大学からの知的資源提供が円滑に結びついた良好な事例と見なすことができる。

平成 16 年度および 17 年度の富山市子どもかがやき教室事例集^{vi,vii}での報告によると、大学生が協力してかがやき教室を実施した事例は本学の CAST の他に富山短期大学の事例があるが、他には大学生が関与した報告は見られず大学生と地域との係わり合いはまだ活発とは言にくい。しかし例えば大学生による地域ボランティアなどにも事例があるように、大学生に対する地域からの潜在的な要求は予想外に多く、様々な専門分野の学生が地域で活躍できる可能性も広いと考えられる。この意味で大学生がもつ知識や技術(場合によっては体力)は地域教育力を向上させるための未開発の大きな資源と見なせる。

大学生が地域活動に協力することは域貢献ばかりではなく、観点を大学教育に移せばこれは実践的學生教育でもある。実際に CAST の学生はかがやき教室の活動をとおして、大学の教室では得ることのできない様々な知識と経験を得ており、その教育的効果は大きい。このようにして、学生を地域に送り出して活動させることは 地域教育力向上と 効果的な実践的教育の両面で効果が高いと考えられる。これを実践するためには、学生の持つ可能性を解りやすく地域に公開すると共に地域からの要請を的確に把握するための仕組みを、今後検討していく必要があると考えられる。

謝辞

本稿で紹介した CAST の活動は、平成 16 年度当時、大山町教育委員会生涯学習係長として活躍された新夕真希夫氏(現:富山市立芝園小学校教諭)の多彩なアイデアと多大なご協力の下で推進されたものです。また平成 17 年度以降は後任の村田良紀氏(富山市大山教育行政センター生涯学習係長)の推進力と献身的なご協力によって CAST の活動を多彩に拡大させて頂きました。あらためてここに感謝の意を表します。

さらに、忙しい学業の合間を縫ってデジタル教室をはじめとするかがやき教室全般の活動を積極的に推進してくれた富山国際大学の多数の CAST メンバーにも深く感謝の意を表します。

参考文献および参照したホームページ

-
- i) 「地域子ども教室推進事業」, 文部科学省,
http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/week/h16jisshi/002_1.htm, 2006 年
 - ii) 「教育、文化及びスポーツ活動を通じた地域教育力再生」, 文部科学省,
http://www.mext.go.jp/b_menu/soshiki2/09.htm, 2008 年 1 月参照
 - iii) 「富山市子どもかがやき教室推進事業」, 富山市教育委員会生涯学習係,
http://www.pref.toyama.jp/cms_cat/105020/00001222/00024802.pdf, 2008 年 1 月参照
 - iv) 松本政和, 絵手紙ペイント, <http://www1.mahoroba.ne.jp/~matumoto/readme/etegami.html>,
2006 年 8 月
 - v) 「地域の教育力の充実に向けた実態・意識調査(速報)」(文部科学省委嘱調査), 子どもの体験活動研究会, 2002 年 1 月
 - vi) 「平成 16 年度富山市子どもかがやき教室事例集」, 富山市教育委員会発行, 2005 年 3 月
 - vii) 「平成 17 年度富山市子どもかがやき教室事例集」, 富山市教育委員会発行, 2006 年 3 月